

不退の位速やかに 得んと思わん人は皆  
恭敬の心に執持して 弥陀の名号称すべし

三月いっぱいまで『阿弥陀経』法話会ということでひとつ区切りが付きまして。今まで『正信偈』法話会、『阿弥陀経』法話会、と続けさせて頂きました。そして、いよいよ区切りを迎えるという時に、ご住職と若さんから相談がありまして、『阿弥陀経』法話会が終了する四月からどうしようかということになりました。『正信偈』とか『阿弥陀経』といいますと、皆さまのようにご聴聞されている方なら基本中の基本のお聖教でありますから入りやすいのかなあとと思います。しかし、まったくお寺に参ったこともなければ、仏法に遇ったこともない方がいきなり『正信偈』や『阿弥陀経』をテーマにされると「どんな難しいことをするんだろう」とそれだけでお寺に行きづらくなると思うわけです。だから今回は、真宗入門法話会として「誰でも聞けますよ」というような形を前面に出して、その中で親鸞聖人の著作の中で非常にわかりやすいのが『和讃』であります。この『和讃』のここを通して真宗入門法話会という形で、その月毎に念仏や本願、信心、浄土、師恩、といった浄土真宗の一番大切なことを順番に「今日はこの和讃を中心に。今度はこの和讃を中心に。」と読んでいきたいと思ひます。

では、改めて自己紹介は必要ないかもしれませんが、新しいことが始まるということですから一応自己紹介させて頂きます。私は、愛知県岡崎市檜山町の浄泉寺衆徒、衆徒というのはまだ住職ではないということです。住職はまだ私の父が元気にしております、こちらのお寺の報恩講にもお邪魔させて頂いています。現在年齢は49歳、9月が来ると50歳になってしまいますが誕生日がくるまではあくまでも40代であることを主張したがる今日この頃であります。

話を進めていきますと、先日車の運転中にラジオを聴いておりました。運転しながらでありますので聞き間違いもあるかもしれませんが、こんなことをやっておりました。「若者の基準というのは国によって違う。基準というのは、何歳までが若者であるか」ということをやっておりました。日本の国では、厚生労働省が「若年者は34歳まで」と規定しております。私が40代であることを主張したからというのは、心の中では40代というのはまだ若者であるという気持ちがあるものですから、まだ若者でいたいという気持ちから主張してしまうわけです。もちろん日本の基準からいいますと、若者は34歳までですから私の年齢ですと引っかけもしないのです。しかし、ラジオではさらに国によって基準が違うことが流れてきました。イランだったかインドだったか聞き間違えたかもしれませんが、ある国では若者の基準は52歳までだったんです。これを聞いた瞬間、私は嬉しかったですね。まだ3年以上も若者でいられるんですから。また、ある本を読んでいますと、サラリーマンのオジン度チェックテストというものがありました。つまり、若者のではない、というテストであります。8つ質問がありまして、その8つの中のいくつが自分に当てはまるかでオジン度が決まるわけです。皆さんサラリーマンではありませんので境遇は違いますが、一度サラリーマンになった気持ちで、多少話が違う方向であってもこのことは共通するな、と心当たりがあるものには指をおって数えてもらいたいです。それでは、始めます。

- 1、 立ち上がる時、「どっこいしょ」といってしまう
- 2、 細かい文字が見えにくい時がある

- 3、 冷房がこたえるときがある
- 4、 人の名前をすぐ忘れる
- 5、 自分が入社した時に生まれたときの子がすでに入社している
- 6、 テレビの歌番組を見ていて、知っている曲がほとんどないことがある
- 7、 昔はモテたでしょうと若い子に言われたことがある
- 8、 若い人の言葉が理解できない

さて皆さん何本指が折れましたでしょうか。正直申します。私は言いながら指を折っていました。折れた指の数は、8本です。全部該当してしまいます。オジン度チェックでいいますと、100点満点であります。いくら40代と主張しても、52歳まで若者であるという国があるとしても、「わたしは100%オジンなのかなあ」と自覚してしまいました。先ほどちょうどここを出てくるときに年齢が話題になっていたようですが、人間の脳みそは20歳を超えると脳の老化が始まり、1日に10万個の脳細胞が死滅するそうです。1年では3650万個の脳の細胞が死滅し、10年で3億6500万個にもなります。20歳から始まりますと、50歳では10億個の脳細胞が死滅し、80歳では20億からの脳の細胞が死滅すると医学的に言われております。恐ろしいですね。おっかないですね。でも心配することありません。人間の脳の細胞は、140億個の脳細胞から脳という細胞ができていますから、140億個の中の20億個が無くなることではさほど大した影響はないのかもしれませんが、けれども、どのような兆候がでて、どういうことになるかといいますと「用事があって隣の部屋に行った、隣の部屋に着いたら何をしに来たかわからなくなった」と。10億個なくなっている50歳代ですと隣の部屋に戻れば思い出すこともありますが、80歳代くらいですと元の部屋に戻ってもやっぱりわからなくなっている程度のもので、生きていく上ではそれほど問題でもないわけです。何が言いたいかといいますと、これは「老い」ということであります。老いは平等、誰にでも平等に訪れるのが老いであります。そしてその老いが病になり、若い人も病気になるわけであります。「老い」というものが病につながることは間違いないわけなんです。そして、この病が死につながるというわけです。この老病死に加えて「生まれる」「生きる」があって生老病死。このことを受け入れることが出来ていないから、前半のように少しでも若者でいたいという気持ちになっているのではないのでしょうか。

「一切皆苦」・・・お釈迦様は「私たちの人生は一切皆苦、一切が苦である」と仰いました。苦というのは、生老病死の四苦ともう四苦（愛別離苦、求不得苦、五蘊盛苦、怨憎会苦）を含めたのが四苦八苦と申します。私たちは、この四苦八苦を正面から見ようとしていないものです。「老い」というものを忌み嫌い、この「老い」が病につながり死につながる、こういったことはみたくないというような言動をとってしまっているのではないのでしょうか。私たちの人生は一切皆苦であります。では、苦が苦のまま終わっていくのでしょうか。苦が苦で終わっていくのなら、こんなに辛いことはありません。苦が苦のまま終わるのではなく、苦があるのだけれども苦が苦でなくなる道がある。苦がなしではなく、苦があることなし、これが仏教という教えの中に用意して頂いているんです。そして、南無阿弥陀仏という道で歩ませてもらっているわけです。これが浄土真宗の教えであり、仏教の教えであります。苦あることなしではなく、苦が転じて宝となる。つまり「労のおかげで初めて大切なものに気付かせてもらいました」や「病気になったおかげで、今まで知らなかった人の支え、人の思いというものに初めて遇わせてもら

いました」と、死を正面から見据えることによって、今まで気付きもしなかった大切なことに遇わせて頂くのです。苦が転じて宝となる、これこそが仏教の教えであって私たち大乘の教えであると思います。

ある年回忌法要のことであります。大谷派のご門徒さんがご親戚としてお参りしておられました。そして、法要後の食事の時に徳利を持ってきまして、「一つ聞きたいんですけどもいいですか？」と私の近くに寄って来られたんです。正直ドキッとしました。なぜか。この門徒さん、何回も何回もご法座で勉強されている方でありまして、ましてやそんな方からの質問であります。私でお答えできるかどうかとドキッとしましたわけです。

「大谷派のお年忌では、だいたいの場合、最後の和讃では「弥陀成仏のことかたは〜」これをやらせてもらいます。これは浄土和讃の一番初めの所にありますよね。内容をみると阿弥陀如来の尊い徳を読み上げられているんです。これをお年忌のときに使うのは、よくわかるんです。しかし高田派のお年忌に来させて頂きまして、いつでも読むのは「不退の位すみやかに〜」ですね。では、と思い、勤行本をみても一番初めは、たいてい「不退の位すみやかに〜」です。どこにあるかと調べてみると、非常に中途半端な位置にあったんです。そして疑問が沸きまして、この和讃を使うのは高田派としてなにか意味があるからではないかと思い、そのことをお聞きしたいんです」と言われました。どのように答えたかは後ほどにして、まず『和讃』とは何ぞや?というのを考えてみたいと思います。さらに『和讃』の話をする前に、親鸞聖人の著作を列挙しまして、代表的なもののみ書いて見ますね。漢文では『教行証文類』、『浄土文類聚抄』、和文では、『一念多念文意』、『唯信抄文意』など。そして今、これから勉強させて頂く『和讃』であります。これは特に『三帖和讃』という形で伝えられています。『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末法和讃』のことです。そこで真宗新辞典で『和讃』のことを調べましたら、「和語で仏教讃歌の一種。七五調で曲調をつけて詠じ、平安時代から教化に用いられた」ということであります。

『和讃』は和文で書かれた讃歌であります。『和讃』には左訓といって説明書きをしてあるところが幾つかあります。『浄土和讃』の中にある『現世利益和讃』の一番冒頭の場所に現世の利益の和讃と書かれているんです。そこでさらに和讃の部分にも、左訓があるんです。なんと書いてあるかといいますと、「ヤワラゲホメ」とあるのです。『和讃』というのは、和文で書かれた讃歌ということと同時に「ヤワラゲホメ」と、讃えて下さった歌が『和讃』ということになります。「和らげ」というのは私たちにより一層わかりやすくという意味が込められていると思います。私たちのこころの動きとして、「知」・「情」・「意」ということが言われます。「知」とは知性・知識・理屈、つまり有限的なものであると思います。こうなっただけでこうある、などですね。ですから、そうならないと理解できないこともある訳です。「情」というのは心のことでありまして、情動・感情・人情などは無限なるものに動かされるわけです。はかりしれないもの、無限的なはたらきに理屈ではなくすべてお任せすることが出来るのが「情」ということであります。「意」とは意志・意欲のことです。科学的・医学的にこのようなことが解明されてきているわけです。人間の脳みその箇所によって「知」によって考える、「情」によって考える、「意」によって考える場所が決まっているそうです。堆積から言いますと、「知」について考える場所は脳全体の60%、「意」について考える場所が脳全体の35%。「情」について考える場所は脳全体の僅か5%。何が言いたいか。「宗教とは何ぞや。」というならば、宗教の本質とはこの「情」に訴えるものであると思います。そして『和讃』とは、「ヤワラゲホメ」でありますから少しでも私たちにわかりやすくして下さって、この情に訴えて下さっているのが『和讃』というものであると思います。では、「なぜ不退の位なのか。」特にこの和讃が、『情』に訴えて下さっているからという事が一番の理由とも言えますが、もう少し考

えてみたいと思います。

まず「専修寺とは何か。」です。私たちのご本山は、専修念仏のお寺だから専修寺なのです。では、専修念仏とは何か。仏を念ずることを専ら修める、専念するということですね。仏を念ずることに専念するお寺だから専修寺と申します。では念仏とは何か。つまり、仏を念ずるということは何のことか。天親菩薩の『浄土論』という書物にお念仏というのは五種類の仕方があり、五念門として伝えられ、挙げられています。

- ①礼拝
- ②讃嘆・・・阿弥陀仏の名を称える
- ③作願・・・浄土に生まれたいと願いをもつ
- ④観察・・・仏や浄土を思い描く
- ⑤回向・・・全ての善を浄土往生の為とする

これが五念門です。

誰にでもできる行・念仏は讃嘆であるとお説き下さったのです。そのことを通して法然上人、親鸞聖人は「讃嘆とは、称名のことであって阿弥陀仏の名を称えることが念仏である。」と述べられています。称名念仏、つまり南無阿弥陀仏と称えることに専念するお寺が専修寺であるのです。自分で称えようとする念仏ではなく他力の念仏。にじみ出てくる念仏が専修念仏であります。この専修寺の勤行スタイルでいいますと、皆でご唱和させて頂くときは、「文類偈」をよく読ませてもらいます。そして「和讃」は五首引で詠んで、その中でも「不退の位～」を特によく読ませてもらうわけですが、ではなぜ「文類偈」をよく読ませて頂くのでしょうか。

「正信偈」、「文類偈」は内容自体はほとんど一緒なのですが、そのもとであります『教行証文類』、『浄土文類聚抄』の選述意趣、その作られた所以をたどってみると、「文類偈」は正式には「念仏正信偈」であります。つまり、念仏において信心、正信が成就されるわけですが、そこで、「まず念仏である」と強く抑えられているのです。正式には「正信念仏偈」である「正信偈」の方は信心において念仏が成就されるわけですが、私たちは、専修寺でありますから「とにかく念仏、まず南無阿弥陀仏なのだ。その南無阿弥陀仏を称えさせて頂く中で信心が成就されていく。」という傾向がありますので、まず私たちの勤行のスタイルとして「文類偈」を読むのです。

では「文類偈」を読ませて頂いてから、なぜ「不退の位～」の和讃なのかを考えてみたいと思います。

「不退の位すみやかに 得ん思わん人はみな 恭敬の心に執持して 弥陀の名号称すべし」

現代語訳は、必ず浄土往生できる不退の位を速やかに得ようと思う人はみな、謹み敬う心を執り保って南無阿弥陀仏と称えよう、と語釈致します。不退の位とは、必ず浄土に往生できる喜びに満ちた位のことです。難しい言葉で言いますと、現生正定聚・現生不退といえます。いま生きているこの現世において必ず浄土に往生して仏になる身に間違いのない身に定まる、ということです。ですから「不退の位速やかに 得んと思わん人はみな」とありますが、いつ得ようと思うなら、死んだら極楽往生ではありません。生きている今生、今得たいと思うわけですが、そして「恭敬の心に執持して」ということは、

他力の信心であります。その信じる心ですら仏様からの賜り物であります。恭敬の心には、親鸞聖人の説明書きがあるのですが、「ツツシミウヤマウ」と書いてあります。ですから心の底から尊敬して信じる、ということが言えると思います。執持とは、しっかり執り保つこと、ツツシミウヤマウ心を執り保つこととあります。「弥陀の名号称すべし」、南無阿弥陀仏と称えよう、とこういった和讃なのです。他力の念仏であるんですが、「とにかく南無阿弥陀仏」ということを抑えて下さっている和讃なのであります。ですから一貫して、専修寺とは専修念仏が由来であること、「文類偈」とは「念仏正信偈」であり、そして「不退の位～」の和讃では「弥陀の名号称すべし」、つまり南無阿弥陀仏なんだということを抑えて下さる和讃でありますから、高田派ではわざわざこの不退の位の和讃を特に大切にに使わせて頂いているわけです。

～休憩～

先日ご本山へ行きました。青少年会館では本が売られているんです。そこで、「万華鏡」という本を買って、こんな話が紹介されていました。

西本願寺の若い僧侶でありまして、僧侶でありながら学習塾を運営していました。その学習塾、毎年のように小学校中学校高校生とたくさんの生徒が集まる訳ですが、年に一回平日であります。保護者に向け説明会を開いていました。平日でありますから、ほとんどが母親ばかりです。ある年の説明会もやっぱり全員母親でした。説明会では、塾のことを説明させて頂きながら、方針を説明しました。そして、1枚の紙を配って「申し訳ありませんが、アンケートに答えて下さい。名前を書いてもらって子供たちの当面の目標を書いてください」、このようにお願いしました。後で回収してみますと、だいたい「〇〇高校入学」、「〇〇中学合格」、「英語の力をつけたい」、「数学の力をつけたい」など。「なるほどな」と思いながら、話を続けました。「今当面の目標について書いて頂きましたが、もうひとつ書いていただきたいことがあります。今度は名前を書かなくて結構です。今からおかしなことをお聞きします。おかしなことをお聞きしますが、おかしなことと思わずに一度真剣に考えて書いてみてください。仮にあなたの命が残った30分しかなければ、あなたは自分の子供さんにどんな言葉を残したいですか？」と。このアンケートには母親たちも戸惑ったそうです。そんな母親たちに無言で目を見ながら「お願いします。お願いします。」という形で頼んでいくと母親たちはペンをとって一生懸命書いてくれました。そして回収して、母親たちが帰られてから1枚ずつ見させて頂いたらびっくりしたそうです。今度は「〇〇大学合格」「〇〇高校入学」とは書いてないのです。1週間あればいろいろ余計なことができますが、残りたった30分。余計なことがまったくできません。そんな中で母親たちが書いた言葉は「家族のみんなを大切にね。」「お母さんは大好きだったよ。」「やさしい気持ちを忘れないでね。」「いつも笑顔でいてね。」「生まれてきてくれてありがとう。」「いつも元気でいてね。」「あなたに会えて本当によかった。」と、こういった言葉がたくさん綴られていたそうです。僧侶兼塾経営者は、読んでいるうちに涙が出てきたそうです。目の前の目標では、「合格！合格！」と言っていた母親たちが、自分のいのちが残り30分しかないと思ったら、初めて気がついた本当の願い、根本の願いであります。本当の心を出して下さったのが今の言葉であります。そこで「こんな言葉をどうしても見せたい」ということで一件一件に電話で連絡をとって、許可を頂いて生徒たちに見せたそうです。名前が書いていないので誰が書いたかはわからないのですが、だいたい母親の字をみればわかる生徒もいたかもしれません。そして、どの生徒

も読んでいるうちに涙ぐんできたそうです。母親の願いに出会った瞬間でありました。そういった願いが、私たちは実は親からだけでなく、阿弥陀様から願われているのです。なかなか親の願いにすら気付いていない私たちであります。仏教の教え、真宗の教え、南無阿弥陀仏の道に遇わせて頂くことで本当の願いに気付かせて頂くのではないのでしょうか。「南無阿弥陀仏」の「阿弥陀仏」というのははかりしれないはたらきを意味します。そして「南無」とは、一番適している言い方としては、「逆らわずに言いなりになる、すべてお任せする」であります。はかりしれないはたらきに逆らわずにそのままお任せする、これが南無阿弥陀仏の言語の意味であります。生かされて生きるいのちに喜んで自然に我が声としてにじみ出てくる念仏が、南無阿弥陀仏なのです。ですからこれははかりしれないはたらきによって賜っている念仏なのです。自分で称えようとする自力の念仏でなく、他力の念仏です。念仏＝仏を念ずること、称名することすら阿弥陀様から賜っておるはたらきなのです。

それでは、テレビの話を少しさせていただきます。みなさん「みんなで日本GO」という番組をご存じですか。4月8日の放送で、すばらしい内容の事をやっておりました。それは何かと申しますと、「日本語が乱れる中で、特に敬語が狂ってきている。それも敬語を使わないということではなく、敬語を使いすぎて過剰な使い方をしている。『～させて頂く』、『～させていただきます』、この使い方がおかしい」と言っておりました。例えばですね、「あす閉店させていただきます」、「営業マンがあす電話をさせていただきます」「あるいはお伺いさせていただきます」などが挙げられます。閉店は「閉店します」でいいですし、電話は「電話します」とか「電話させてもらいます」でいいですね。そういったおかしい例をあげる中で、「この度結婚させていただきました」という言葉使いが正しいか正しくないかを検証し始めました。たくさんのタレントさんや素人の方が総勢100人以上いまして、その人たちにこの言葉使いが正しいかどうかのイエスノーのアンケートを取ったそうです。統計をみて、私びっくりしました。正しいと答えたのが全体の27%、正しくないと答えたのが73%だったのです。ほとんどの人が正しくないという中で、タレントの女医Nさんが一人でさらに強く強調しておりました。「この言葉づかいは明らかにおかしい。結婚とは「～させて頂く」ものではなく、結婚はするもんなんだから。私の場合は、するどころかしてあげたんだからこの言葉使いは絶対おかしい！」とこう主張されるんです。その後、「～させて頂く」という言葉の語源を調べていくんですが、これは近江商人が使い始めたそうです。近江商人が「それでは明日の何時に届けさせていただきます」などのビジネストークが由来だそうです。近江商人が全国各地で商売することでこの「させていただきます」ということが全国に広まっていったのです。ポイントは、この近江商人は真宗門徒である、ということなのです。近江の国は、寺ばかり、特に真宗寺院ばかりです。真宗門徒として「させていただきます」ということは他力思想というものが根本にある。つまりお念仏のところであります。人は阿弥陀如来のおかげで生かされている、みなおかげさま、その気持ちが「～させていただきます」という言葉になった。目の前の相手だけでなく、もっと大きなはたらきによって生かされてある、その気持ちが顕著にあらわれて「(おかげさまで)～させていただきます」という言葉になったのです。へりくだってある相手は目の前の人だけでなく、すべてのものを超えるもの、そのはたらきによって「(おかげさまで)～させていただきます」これが言葉の語源となる訳です。となると、この「結婚させていただきました」ということも、本来は「(おかげ様で、この度ご両親のおかげ、沢山の人ののおかげ、いろんな人の支えがあって)結婚させていただきました」となるのです。このことを説明した上で、再度アンケートをとりましたら、この言葉が正しいといった人が83%、それでもなおかつ17%の方がまだ納得できないとの答えでした。素晴ら

しい番組をやってくれたと思いました。「～させて頂く」というのは、本来は「おかげ様」で、その「おかげ様で」とは何かといいますと、影は見えませんね。つまり、はかりしれないはたらきであります。はかりしれないはたらきのおかげで「～させて頂く」、まさに南無阿弥陀仏のお心そのものではないかと思えます。無限なるはたらきにすべてお任せする、心から信じる、というのが恭敬の心ということではないでしょうか。

「わしが聞いたじゃありません わしがきいたなありません ころにあたる

なむあみだぶつ いまはあなたにうたれてとられて」浅原才一

この方は、熱心な念仏者でありまして、妙好人として伝えらえる人です。島根県の下駄職人で、昭和7年に83歳で亡くなられているのですが、この詩は45歳のときに書かれたものです。字もまともに書けない、学問があるとはいえない方でした。その才一さん、下駄を作るときに木片が出るんですね。木の端がでる。その木の端に、詩を作って書きとめられたそうで、たどたどしいカナで書かれたようです。字がわからない訳ですからね。その木片に書き記した詩を、才一さんが亡くなった後、昭和26年世界宗教者会議で仏教学者である鈴木大拙博士が世界に向けて紹介したのです。そして、日本の優れた宗教者として才一さんを紹介したのです。町中びっくりしたそうです。才一さんのことを知っている方もおとなしい、よくお寺にお参りされるあまりしゃべらない方だと見ていたので、そんな方を世界中に紹介したことにびっくりしたそうです。才一さんがどういう方かといいますと、まさに「知」ではなく「情」で仏法に遇われた方であると思えます。

仏教の教えもいくら「知」・理屈で考えてもいくら内容を頭で暗記するくらいやっても、これはわかったといえませんが。仏教の教え、真宗の教え、南無阿弥陀仏がここに訴えられ、そこで本当にお味わいとして喜びが生まれてこないことには、仏教がわかったとは言えないのではないかと思えます。そういうならば、浅原才一さんは「知」ではなく「情」、この「情」によって南無阿弥陀仏の道に遇われて、その喜びを味わっていかれた方なのでありましょう。「わしが聞いたじゃありません わしがきいたなありません ころにあたる なむあみだぶつ いまはあなたにうたれてとられて」。南無阿弥陀仏しかありません、と。「不退の位～」の和讃とつながってくるかと思うんです。まさに「知」ではなく「情」に訴えてくださる、この「情」に訴えてくださる親鸞聖人の著作がヤワラゲホメ・『和讃』というものであると思うんです。これからしばらく皆様とこの『和讃』を一緒に読んでいきたいと思えます。今回は「本願」というところでお話をさせて頂きたいと思えます。

平成22年4月21日